



第3回研修委員会リレーコラム

この絵本に出会えたことに、感謝!!



森 未希子

今までの人生経験をもとに、子どもにアドバイスのつもりでつつい声を掛けてしまうけど、子どもたちの反応が…。なんて経験、皆さんありませんか？子どもの感じ方は十人十色。慎重な子はアドバイスを受けてその道を避ける子もありますが、自分で失敗してもいいからやってみたいと思う子、また自分のことだから自分で考える!と言いつつも出来なくてパニックになってしまう子様々です。

もちろんどれも間違いではありません。自分で経験して気づいたことの方がより一層子どもの人生の糧となります。私は失敗した時こそ『いい勉強になったね。』と子どもたちを励ますようにしています。先走らず、子どもの人生の伴走である気持ちになって読み聞かせをすることで、子どもと一緒に成長したり、子どもの感じている辛さに共感したり、日常ではうまく言葉で言い表せないけど、本を通してなら伝えられることもあるはずです。

今回紹介する絵本は、特に発達障害を抱える子どもと読むことで役立った2冊です。声掛けで伝えるよりも絵本を通して視覚に訴えることで子どもも理解しやすく、また子どもとのコミュニケーションの幅が広がりました。

おやくそく えほん

「メシが食える大人に育てる」という理念のもと、「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を主軸にすえた学習塾「花まる学習会」を設立した 高濱 正伸さん監修です。

世の中にはたくさんのルールがあります。人と関わっていく上で、最低限身に付けておきたい42の習慣が書かれています。一つ一つのおやくそくにしっかりと理由づけがなされているので、子どもの心にもスッと溶け込んでいくのが感じられます。

おやくそくリストもついているので、子どもと一緒に振り返りをしながら、大人も出来ていない所を共に気をつけて生活していくことができます。我が家ではお話をクイズのようにして、「きらいなたべものでも？」と私が聞くと、「ひとくちたべてみる」と言って、頑張っ食べしてくれます。嫌いだったものでも調理方法や味付けの違いで今日は食べられた！なんてこともありますよね。

また「つかったものは？」「もとのばしょにもどす」と言って急いで片付けてくれたり、「ようじがあるなら？」「じぶんでいく」とブツブツ文句を言いながらも自分で動いています(笑)絵本のお陰で子どもたちが自分で気づいて行動できるよう、そんな関わり方を楽しんでいます。

今回紹介したのは、小学校低学年が対象ですが、お兄さん・お姉さん版の「よのなかのルールブック」もあるので興味がある方は、是非読んでみてください。

発達凸凹なボクの世界 一感覚過敏を探検する一

お話と絵は 細尾 ちあきさん(看護師)、解説は 北野 陽子さん(精神科医)、子どもから大人まで感覚過敏について優しく学べる実践書です。

食事の時間になると、不機嫌な日とそうでない日があり、「どうかした？」と聞いても、「いや別に・・・」と理由を教えてくれない子がいました。きっとうちに來たばかりで遠慮していたのでしょう。何日かして、「この皿が嫌です。」と教えてくれたのです。ですが、感覚過敏を知らなかった私には、何で？何が嫌なの？汚れてた？など、私の頭の中は疑問符だらけ。「柄が無理」と言われたけど、柄と言っても、おかずが乗っていて柄なんて何も見えていないのに、何で？とまた疑問。

そんな時に、この本と出合いました。私には分からないけど、この子にとっては逃げ出したいくらい我慢の出来ないことなのに、必死にこらえて生活していたのかと思うと、胸が苦しくなりました。自分の苦手を理解して、相手に伝えることができるなんて、本当に素晴らしいことです。

子どもと共に感覚過敏を身近に感じ、それに対しての実践法まで書かれているので、自分で気づかずに生活していた子もこの本を通して、「この気持ちわかる」と自分の思いを伝えてくれるきっかけとなっています。